

7. おわりに

半世紀をこえる歴史を持つ水俣病事件、そして、2011年3月11日の福島第一原発事故を経験し、同時に、国内外の環境被害（公害被害/健康被害）と直面する現場に足を運び、今、先の見えない「コロナ禍」に向き合う中で考えること

⇒ 地域の自立的発展に必要な4つの視点



地域の自立的発展に向けた4つの視点

1. 「予防原則」に基づいた初期対応の重要性を再確認する

→ 「健康被害が顕在化してからでは遅い」

(原田正純)

水俣病事件の初期対応をめぐる問題点：

- ①自然界の異変を軽視 (チツソ・熊本県・国)
- ②ネコ実験の結果を隠ぺい/黙認 (チツソ・熊本県・国)
- ③食品衛生法の不適用 (熊本県・国)
- ④本人申請主義 (熊本県・国)

⇒ 坂東克彦氏 (2014年度水俣学講義 第8回)



地域の自立的発展に向けた4つの視点

2. 中央（国）と周縁部（地方） という構造の存在

キーワードは、「見下し」 / 「植民地化」

現状：「中央」から見下された「地方」に、「差別と犠牲」が押しつけられている

⇒地域の内発的な発展（「地域力」の醸成）を阻害する近代化（開発と工業化）

事例として、

マプタプット工業団地（タイ）

ティラワやダウェイの大規模開発（ミャンマー）

水俣、福島、沖縄（日本）



今、私たちに求められていることは？

- ①地域の風土・歴史・文化に根ざした地域固有の解決策（地域のあり方）を見出し、
- ②それを外に開き、グローバルに共有することによって、
- ③一つひとつの、ひとり一人の命の尊厳が保たれる社会の実現に粘り強く取り組んでいくこと。

Think Locally, Act Locally & Globally !



3. 新たな民主主義の確立

現状：社会的合意形成の「仕組み」をどう作り上げるかという課題に対する様々な試み

- 様々な利害関係者の交流、相互理解、合意形成の場としての「円卓会議」や「プラットフォーム」 ⇒ 水俣・芦北地域戦略プラットフォーム（潤滑油としての水俣学現地研究センター）

- 情報共有と対話、論点整理、社会的発信のツールとしての「リスクコミュニケーション」

⇒ マプタプット問題 ”工業団地と地域の共存” をテーマとして



4. 地域固有の資源を地域で活用する

現状：自然に寄り添うようにして生きてきた人々が、最初に、しかも、最も深刻な犠牲を引き受け生活している。⇒ 「公害のあるところに差別が生まれるのではなく、差別や偏見のあるところに公害が起きる」（原田正純）

・地域の資源としての太陽光、水、風、土、鉱物、森林、川/海などの自然資本の活用を地域住民の手で行うことによって、地域の持続可能性を、「環境」、「地域経済」、「社会的公正」の3つの側面から高めて行くこと

⇒ 森下直紀氏（2014年度水俣学講義 第13回）
“コモンスの管理が機能する条件”



最後に



今、私たちに強く求められているのは？

地域固有のローカルな問題に 向き合い、解決策を見出す

- ✓ 当事者主体の内発的な取り組み
- ✓ 多様な主体/利害関係者の関与
- ✓ 社会的困難に向かう国内外の地域間の連携/連帯
- ✓ 水俣病事件や3・11に象徴されるこれまでの「社会・経済システム」との決別し、**将来を自らの意思で「選び取る」**